©日本記者クラブ 2023


# 日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/





**祭一色**　京都・祇園祭前祭の「山鉾巡行」で、四条通を進む先頭の長刀鉾。4年ぶりに通常開催となった=7月17日　撮影：井田　公雄（共同通信社京都支局）

## ゲストにお願いする揮毫 自分だったらと考えてみる

記者会見のゲストには揮毫をお願いする。筆を用いる人はあまりいないので、厳密にいえばゲストブックにサインとともにひと言をいただく。白紙を前に黙考する人、過去のゲストの言葉を繰る人。訪れる静寂の間が何ともいえない。

政治家はいざしらず、揮毫する機会など、そうはないだろう。と思いつつ、ふと、自分が求められたらと考えた。チコちゃんを出すまでもなく、ボーっと生きてきた身にはなかなか浮かばないが、結局たどり着いた言葉があった。もう30年以上前、朝日新聞の文芸時評の見出しになった言葉だ。

場違いなその見出しにまず引きこまれた。「時評」といいつつ、取り上げたのは40年以上前に亡くなった太宰治の「親友交歓」だった。その言葉は、太宰に投げかけられた「親友」の言葉であり、太宰自身の言葉であり、文芸時評の筆者、高橋源一郎さんの言葉でもあった。さらに言えば、すべての「もの書く人」、新聞記者だった自分にも投げかけられていた。「ものを書くということは、きれいごとをいうということである」「『私は間違っている』と書くことさえ、そう書く自分の『正義』を主張することによって、きれいごとなのである」と高橋さんは書く。そして、太宰の「もの書かぬ親友」が吐いた言葉こそが、もの書く人の不正義の唯一の救いなのだと。

「威張るな！」。その時、心に刻んだはずだ。その後の歩みを思うと心もとないけれど。そして書き記す機会などないだろうけれど。（専務理事　江木慎吾）

# 同じゲストが週に2回
# 注目集めたグロッシ会見


国際原子力機関（IAEA）ラファエル・マリアーノ・グロッシ事務局長の記者会見＝7月4日

7月は日本記者クラブの歴史に残るできごとがあった。少し大げさかもしれないが、同じ人物が2日あけて2度、会見するという珍しいことが起きた。合わせて600人以上の記者が参加する、国際的にも注目を集めた会見になった。

7月4日から7日の予定で来日する国際原子力機関（IAEA）事務局長のラファエル・マリアーノ・グロッシ（Rafael Mariano Grossi）さんが最終日の7日に記者会見をすることは、企画委員の働きかけのおかげで決まっていた。訪日の主目的は、政府が海洋放出を予定している東京電力福島第一原発の処理水についての検証報告書を岸田文雄首相に手渡すことだっただけに、注目の会見になると思われた。

6月の最終週になって、IAEA側からグロッシさんが岸田さんと面会する4日に、処理水に関する報告書に絞った記者会見を開きたいという申し入れが事務局にあった。事務局の担当者と何度かのやりとりの後、4日の記者会見が決まった。

タイミングを考えれば、記者会見の注目度はさらに上がることは明らかだった。処理水の海洋放出の安全性は国際的に注目されているだけに、IAEA側の意向をくんでクラブの会員ではない外国メディアも幅広く受け入れることにした。このため、会場の警備はかなり厳重になった。岸田文雄首相が襲われる事件が発生しただけにやむを得ないとは思ったが、10階ホール内に10人近い警察官が配置された。

4日の記者会見時間は午後4時50分から5時20分までの30分のみ。直前まで予定があり、控室に寄ることができるかはわからないとのことだった。日本プレスセンタービルの外側では少人数の抗議活動があった。結局、グロッシさんの到着は開始時刻を回り、直接、10階ホールに駆けつけた。直前の予定が、岸田さんとの面会だった。

会場には外国メディアも多く詰め掛けた。事前に中国の記者から「外国メディアからの質問も受けるべきです。国際的に注目されているのに、外国メディアの質問を受けないと問題になります」と言われた。「だれの質問を受けるかは、司会者にまかせています。司会者も国際的な関心の高い問題であることは承知しています。ただ、時間が限られていて、必ず質問できるとは約束できません」と答えた。結果的に中国、韓国の記者も質問した。

7日の記者会見も予定通り、実施した。この時は前回の倍近い時間があった。内外の記者からの多くの質問の一つ一つに、グロッシさんは冷静に答えた。会見を終えた帰りのエレベーターの中で、グロッシさんは「16……16の質問」とつぶやいた。

目次


▼今月のクラブゲスト 3
▼会見リポート 4▾6
ラファエル・マリアーノ・グロッシ 国際原子力機関（IAEA）事務局長／森達也 映画「福田村事件」監督／金森穣 演出振付家、舞踊家／中森広道 日本大学教授／「アジアの未来と日本の戦略」日米の研究者による提言発表／ウクライナ現地取材と報道の課題
▼記者ゼミ 7
▼日本記者クラブ賞受賞記念講演会 8
▼ワーキングプレス 9▾10
ワグネル反乱 NHKスペシャル NHK 鴨志田郷
6月の衆院解散見送り 産経新聞社 水内茂幸
▼新・列島報告 岩手県 11
盛岡市、NYタイムズ紙効果で観光客増 岩手日報社 刈谷洋文
▼被災・防災・減災 最前線 12
熱海土石流から2年 静岡放送 和田啓
▼リレーエッセー 13
菅原幸助さん 中国残留孤児支援に奔走 神奈川新聞社 鈴木達也
▼書いた話書かなかった話 14▾15
「御巣鷹山」の誤報 正せず悔い 滑志田隆
▼放送人政治懇話会の58年 16
鈴木勝利
▼マイBOOKマイPR 17
▼写真回廊 20

# 今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートは右のQRコードを開きウェブサイトで読めます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。

## 伊藤 高史さん 同志社大学教授



「ジャニーズ事務所における性加害は立件されておらず、訴訟リスクを考慮し捜査機関や裁判所などの事実認定を待って報じるという主要メディアの一般的な慣行からみても報道は困難だった」「メディアは芸能事務所の追及に加え、性暴力への国の対応を注視すべきだ」

■6・30／出席：会18人、オ40人／「ジャニーズ問題から考える」④メディアと権力／司会：田玉恵美会員

## 廣井 悠さん 東京大学先端科学技術研究センター教授



「関東大震災から100年たっても都市の地震火災のリスクは大問題。出火率は低下したが都市の拡大で出火件数は増加する。延焼リスクは減少したがビル火災という新リスクが発生した。消防団員は減少した。避難計画は改善されたが火災からの逃げ方が下手になった」

■7・12／出席：会23人、オ49人／「関東大震災100年」⑤首都防災／司会：黒沢大陸委員

## 蔵元 左近さん 日本国弁護士、米国ニューヨーク州弁護士



国連の人権に関する指導原則は、企業とその取引先も人権に配慮する責任があると提唱する。「テレビ局やスポンサーは、今回の問題と同様の事案を防ぐための体制整備をジャニーズ側に厳しく要請すべきだ。取引関係の停止は、被害者の働く機会を奪い救済にならない」

■7・21／出席：会16人、オ38人／「ジャニーズ問題から考える」⑤ビジネスと人権の観点から／司会：田玉恵美会員

## 大知 久一さん 日本損害保険協会専務理事



「東日本大震災は地震保険制度創設以来、最大級の災害。地震保険金を迅速に支払うために航空・衛星写真による共同調査で全損地域一括認定などを行った」「次の巨大地震に備え、適切かつ迅速な損害調査のためウェブ経由で損害状況を自己申告できるシステムを構築中」

■7・26／出席：会15人、オ34人／「関東大震災100年」⑦日本の地震保険～制度の創設と変遷、大震災時の対応の記録／司会：菅野幹雄委員

## 山口 芳裕さん 杏林大学医学部救急医学教室教授



地震の死因は火災や建物倒壊、津波による直接死（即死）が大半を占め、「医療が救える命は５％に満たない」。米国のFEMA（連邦緊急事態管理庁）のように、災害時に政府や自治体を調整する機関が必要だとし、消防団といった地元力を付ける重要性も強調した。

■7・28／出席：会17人、オ32人／「関東大震災100年」⑧災害救命の主役は医療ではない／司会：浅井文和会員

＊下記のゲストの会見リポートは４～６ページに掲載しています

## Rafael Mariano Grossiさん 国際原子力機関（IAEA）事務局長

■7・4／出席：会119人、オ258人／ALPS処理水について／司会：杉田弘毅委員／通訳：大野理恵さん、渡辺奈緒子さん

■7・7／出席：会101人、オ145人／訪日の成果、IAEAの活動について／司会：杉田弘毅委員／通訳：池田薫さん、吉國ゆりさん

## 森 達也さん 映画「福田村事件」監督

■7・5／出席：会34人、オ34人／「関東大震災100年」④／司会：早川由紀美委員

## 金森 穣さん Noism Company Niigata芸術総監督、演出振付家、舞踊家

■7・18／出席：会29人、オ32人／著者と語る『闘う舞踊団』／司会：中村正子委員

## 中森 広道さん 日本大学教授

■7・19／出席：会21人、オ44人／「関東大震災100年」⑥災害における流言と報道―災害情報の課題を考える／司会：元村有希子委員

## 「アジアの未来と日本の戦略」日米の研究者による提言発表

添谷 芳秀さん 慶應義塾大学名誉教授
マイク・望月さん ジョージ・ワシントン大学准教授
渡邊 啓貴さん 帝京大学教授
須川 清司さん 東アジア共同体研究所上級研究員
芦澤 久仁子さん アメリカン大学専門講師

■7・24／出席：会27人、オ45人／司会：杉田弘毅委員

## 記者に聞く ウクライナ現地取材と報道の課題

喜田 尚さん 朝日新聞社国際報道部、前モスクワ支局長
横島 大輔さん 日本テレビ放送網国際部担当副部長
古川 英治さん ジャーナリスト、元日本経済新聞社モスクワ支局長（リモート登壇）

■7・25／出席：会26人、オ63人／「ウクライナ」㉓／司会：杉田弘毅委員

## ラファエル・グロッシ
国際原子力機関（IAEA）事務局長
7月4、7日

### 科学的評価に社会的質問



東京電力福島第1原発では、現在も放射性物質で汚染された水がたまり続け、浄化した「処理水」の貯蔵タンクが敷地を埋めている。政府と東電は希釈して海洋放出する計画だが、国内外に反対がある。政府から検証を依頼されたIAEAのグロッシ事務局長は会見で、検証結果について「国際的な安全基準に合致する」と説明した。

グロッシ氏は会見直前に岸田文雄首相へ報告書を手渡した。政府が放出を最終判断する前提条件の一つとされ、会見場には海外からも多数のメディアが集まった。

冒頭でグロッシ氏は「環境への放射線の影響は無視できるほどだ」と結論づけたことを紹介。質疑では放出の安全性や、不安の声にどう向き合うかに関心が集まった。

中国からの記者が浄化設備の信頼性を問うと、グロッシ氏は、処理水を複数の研究施設で分析して比較したが、異常は見つからなかったとし「信頼できる」と断言した。

放出への不安や懸念には「包括的で中立的、科学的な評価が必要。私たちはそのことに自信を持っている」と述べ、IAEAの報告書の意義を訴えた。同時に「全ての意見に耳を傾け、客観的な答えを提供する」と語り、第1原発に職員を常駐させ、監視に当たることも明らかにした。

会見内容は国内外で速報され、放出の正当化に利用される是非や、報告書の作成過程の妥当性が論点として浮上した。

7日の会見でグロッシ氏は「中立的な評価を提供するのが役割だ」とし、放出はあくまで政府や東電が決めると強調。「（報告書の）プロセス、結論の全てに自信がある」ときっぱりと答えた。

報告書は科学的、技術的な内容だが、会見全体を通して「社会的に受け入れられるのか」という質問が多く向けられた。海洋放出は、その人の置かれた立場で受け止めが異なる。政治的な意図も絡み、問題が複雑化していると、改めて感じさせられた。

共同通信社科学部　竹内　知史

## 「関東大震災100年」④
## 森　達也
映画「福田村事件」監督
7月5日

### 忖度しない記者が必要



オウム、放送禁止歌、右翼、死刑、天皇……。火中の栗を拾うような主題をわざわざ作品化してきた森達也さん。その鬼才が初の劇映画作品で選んだ題材は、歴史の闇に埋もれていた100年前の虐殺事件だった。一貫してこだわり続けてきた「集団」そして「メディア」の問題に、今回もがっぷり四つに組んだ作品と言える。

関東大震災発生5日後の1923年9月6日、千葉県福田村（現野田市）で、香川県の被差別部落から来た行商団15人が朝鮮人と決めつけられ、地元の自警団に襲われ9人が惨殺された。そのままの表題「福田村事件」（9月1日公開）の焦点は、ごく普通の市井の人々が残忍な「加害者」と化す過程だ。

「こういう映画は、被害者の視点で作るのが普通です。でも描きたかったのは、善良な人が環境次第で悪を犯すということ。他人事ではない。誰にでもその要素があるんです」

その誘発要因は、不安に駆られ人々が群れ化すること。「特に日本人は、和を乱さない。集団になった時に間違いを犯す。その傾向が強い」

100年前、その「集団化」のトリガー要因は、メディアだった。新聞は流言飛語の真偽を確かめず「不逞鮮人」への警戒をあおった。今作では、真実を伝えようと葛藤する記者と上司との軋轢も重要なモチーフになっている。

報道が作為と不作為を犯さぬためには、何より個々の記者が自主規制に陥らず、一人称の主語を持ち続けることだ、と訴える森さん。「故ジャニー喜多川氏の性加害疑惑や、旧統一教会と自民党の問題も同じ。記者たちは皆知っていたはず。馴致（じゅんち）されない、周りを気にしない記者が、もっと増えるべきです」

報道に携わる私たちへの、大きな戒めかもしれない。

朝日新聞社オピニオン編集部　石川　智也

## 著者と語る『闘う舞踊団』
## 金森　穣　演出振付家、舞踊家
## 人生賭けた劇場文化の闘い
7月18日

「あらゆる舞台芸術を愛する人々の時間と労力、人生を賭けた闘いが報われることを願っています」

新潟市を拠点に、国内唯一の公立劇場専属舞踊団「Ｎｏｉｓｍ　Ｃｏｍｐａｎｙ　Ｎｉｇａｔａ」を率いてきた金森穣さん。その軌跡と生い立ちをたどった初の著書は、脆弱な日本の文化行政への提言でもあり、舞台関係者以外にも広く読まれた。



反響について、地元関係者ですら「全く知らなかった、という反応でした」と会見で苦笑した金森さん。普段は非言語表現をしているだけに、「言葉には力がある」と実感したという。

改めて、著作に込めた思いを問われ、「『金森穣だからできた』といわれたくない。社会に劇場文化があり、そこに課題を見つけ、どう変えたら成熟していけるか。その闘いの記録を残し、参考資料となれたら」と未来の〝後継者〟への願いを込めた。主宰する舞踊団の活動を通じ、１００年後の日本の劇場文化に提言したい、という大きな視点の持ち主。こと日本の文化行政に話題が及ぶと、ヨーロッパで活躍した若き日々や、帰国後の新潟での実体験に裏打ちされた言葉があふれ出した。

「そもそもこの国の劇場に専属の芸術集団が普通にあったら、コロナ禍で、国の対応があれほど遅れることはなかった」

新型コロナウイルスの影響で、舞台芸術が大きな打撃を受けた後の政府の対応、日本社会における芸術家の価値、日本における劇場の役割…日本の劇場文化の課題は山積しているが、あくまで未来志向だ。

「社会からこぼれ落ちていくものを、社会の上の方に対し、提示したい。だから１００年かかるんです」

恒例の揮ごうには、「志」と書き込んだ。「『自分を超えたもの』にかけるため必要なもの。そのため、闘っていきたい」

闘いは続く。

産経新聞社編集企画部　飯塚　友子

## 「関東大震災１００年」⑥
## 中森　広道　日本大学教授
## 流言飛語　打ち消す報道を
7月19日



関東大震災では震災の混乱で、流言飛語が飛び交った。流言飛語は不安を抱えた人々を駆り立て、虐殺が起きた。日本大学の中森広道教授は流言飛語が発生したメカニズムや当時の新聞報道を紹介し、「メディアのチェック機能が十分に働いておらず、流言を広めたり、補強する役割を担った」と指摘する。

震災直後から流言飛語は広まった。「朝鮮人が井戸に毒を投げ入れた」などと誤った情報が出回り、新聞は裏付け取材をせずに報道。自警団が朝鮮人を虐殺し、中国人や日本人も標的となり犠牲者が出た。内閣府の中央防災会議が２００９年に公表した報告書では、震災の死者・行方不明者10万５０００人のうち、１～数％が虐殺の犠牲者としている。

なぜ、誤った情報が拡散されたのか。中森教授は朝鮮半島の植民地化と独立運動を背景に、日本人は朝鮮人に仕返しされるという潜在的不安や偏見を抱えていたと分析。そのような社会的緊張に加え、人々の自然災害に対する不満のはけ口となり、流言飛語が広まったと指摘する。

関東大震災の流言飛語は１００年前の話として片付けられない。２０１６年の熊本地震では「近くの動物園からライオンが放たれた」という誤った情報が広まった。ネット上の情報や口づてで拡散された。情報を発信した男性は偽計業務妨害容疑で熊本県警に逮捕される事態にまで発展した。

関東大震災の流言飛語のメカニズムは現代でも共通しているだろう。むしろ、ＳＮＳなどで個人が容易に情報を発信できるようになり、誤った情報が急速に広がる恐れがある。

中森教授は「過去に起きた流言の知識を増やすことが、うのみにしない動きにつながる」とリテラシー向上の必要性を挙げる。その上で、メディアに対して「時間がかかっても（流言飛語を）打ち消してほしい。それが安心材料になる」と求めた。

毎日新聞社社会部　島袋　太輔

## 「アジアの未来と日本の戦略」
## 日米の研究者による提言発表
## 親米自立のアジア外交を

7月24日

日米同盟を重視しつつ、豪印などミドルパワーとの連携に軸足を移してアジアに安定と繁栄を築けないか――。国際政治や安保にくわしい日米の研究者や元外交官11人の有志グループが外交提言「岐路に立つアジアの未来」をまとめた。

「親米自立」の基本コンセプト、「中台のTPP加盟」「反撃能力ではなく専守防衛の強化を」などの提言だけをみれば、中国の軍事的台頭など日本を取り巻く安全保障環境の変化を軽視した楽観論と冷ややかな反応もありそうだ。

だが、メンバーを突き動かしたのは、むしろ「抑止一辺倒に突き進めば、米中の衝突コースに日本が巻き込まれる」(共同代表の添谷芳秀・慶應大名誉教授、写真左から3人目)危機感だ。パワーポリティクスの発想に過度に縛られない外交の構想を説く。



渡邊啓貴氏(左から2人目)、須川清司氏(左から5人目)

もう一人の共同代表であるマイク望月・ジョージ・ワシントン大准教授(左から4人目)は「かつては日本が自立路線をとれば米国に見捨てられるのでは、との懸念が(日本側に)強かった。今や日本の貢献なくして米国は戦略を遂行できない。日本にはレバレッジがあるのです」という。

この点は、トランプ政権時代にワシントンに駐在し、米国の力の相対的低下と、国内政治の脆弱性が外交に及ぼす悪影響をつぶさにみてきた筆者も同意するところだ。

芦澤久仁子・アメリカン大専門講師(左から1人目)は「11人のうち3人が女性。(男性一色になりがちな)外交安保に関する報告書作成では画期的」と高く評価した。

惜しまれるのは、昨年暮れの岸田政権による安保3文書の閣議決定前に発表されていたら、よりインパクトを与えたであろうこと。アジア情勢の緊張は続く。今後の関心の広がりと深まりを注視したい。

朝日新聞社論説主幹代理　沢村　亙

## 記者に聞く　ウクライナ現地取材と報道の課題
## 残る決断、戦い続ける心は

7月25日







昨年2月のロシアの侵攻以来、当クラブでは、専門家を講師とする勉強会を重ねてきたが、記者を招いて戦争報道をテーマとするのは初の試みである。

朝日新聞の喜田尚氏(写真左)は、大多数の日本メディアが撤退する中、侵攻時のキーウに残る選択をした。「ウクライナ問題を継続取材してきた私にとって、現場を離れる判断は個人的にはなかった」という。ただ、なぜキーウに残るのか、脱出ルートはあるのか、などをめぐって本社と話し合い、社内の理解があって侵攻時の取材が可能になったと説明した。

日本テレビの横島大輔氏(中央)は、膨大な量で流れる戦場映像について、ボディカメラやドローンの登場で迫力ある映像が手に入る一方、フェイクニュースの危険性と裏腹であり、真偽を判断するスキルが日々求められると指摘した。自前のドキュメンタリーをつくったときは、「すべて自分たちのカメラだけで取材した映像でつくろうと決めた。撮ってきたものを見つめ直す作業だった」と振り返った。

元日経記者の古川英治氏(右)は、「妻がウクライナ人なので、当事者でもある」と断ったうえで、現地に住むフリー記者として、なぜウクライナが戦い続けているかをテーマとしていると語った。日々感じるのは「ウクライナ人の前向きのタフさ。上からの統制ではなく、自分にできることをやるという自主性だ」という。

質疑では、「日本の報道はウクライナ寄りではないかとの指摘がある」という点については、喜田氏が「戦争の構造としてはロシアの侵略戦争であるのは明白だ。だが、個々の戦況情報については慎重に判断しており、その二つは別だ」と答えた。

また、古川氏は「今回の侵攻は2014年のクリミア併合に始まる。しかし、日本の政府もメディアも、北方領土問題に関心が集中して、プーチン政権がやってきたことに反応が弱かった。その検証をすべきではないか」と問題を提起した。

朝日新聞出身　三浦　俊章

## 記者研修会開催のお知らせ

２０２３年度の記者研修会を対面とオンラインを併用して開催します。今回は、若手からベテラン記者までためになる記者の基本講座から、性被害者取材にどう向き合うか、オープンデータを使った取材手法をテーマに学びます。詳細は会員社の編集・報道責任者に開催案内をお送りしました。またクラブのホームページにも掲載しています。ふるってご参加ください。

**【開催日】**
8月24日（木）、25日（金）

**【場所】**
日本記者クラブ10階ホール

**【申し込み締め切り】**
8月17日（木）正午
下記のQRコードからお申し込みください。

**【問い合わせ先】**
日本記者クラブ事務局　河野、淺田
TEL：03－3503－2764
e-mail：kono@jnpc.or.jp

**【プログラム】**

**■8月24日（木）**

**①記者「基本のキ」**
奥山俊宏・上智大学教授、元朝日新聞編集委員
澤康臣・専修大学教授、元共同通信編集委員
「なぜ実名を報道するのか」「取材対象者と良い関係を築くには」など、記者が心得ておくべき「基本のキ」を考えます。若手はもちろんベテランまで改めて記者の仕事を考える機会に。

**②性被害者取材**
河原理子・東京大学大学院情報学環特任教授、元朝日新聞編集委員
性暴力を受けた被害者を取材するときに気を付けるべきことは何か、取材にどう向き合うべきか。参加者の皆さんからの質問や相談も一緒に考えます。

**■8月25日（金）**

**③オープンデータ活用術**
熊田安伸・SlowNewsシニアコンテンツプロデューサー、元ＮＨＫネットワーク報道部専任部長
ＮＨＫ時代に行ってきた調査報道を通じて培った様々なスキルをまとめた著書『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』（新聞通信調査会）を基に、公開情報を取材に生かすテクニックを紹介します。

**④オープンデータ活用実践報告**
オープンデータを使って取材、報道した４つの実例を報告してもらいます。

1．旧統一教会の過去のホームページを探す：曺琴袖・ＴＢＳテレビ「報道特集」編集長、廣瀬誠・ディレクター
2．国からの事業委託を調べる：高橋祐貴・毎日新聞社記者
3．不動産登記・法人登記の基本と意外な使い方：本間純・日経ＢＰ「日経不動産マーケット情報」編集部記者
4．消えた国の資料から海上保安庁での１００％落札を調べる：郡義之・ＮＨＫ帯広放送局記者

## 土曜記者ゼミ

### IT編③ はじめてのMapbox

**7・8／講師：寺田和弘 マップボックス・ジャパン合同会社シニアアカウント・マネジャー／出席：会場８人、ウェブ22人**

**■地図を自由にカスタマイズ**

Ｍａｐｂｏｘは、目的に合わせて様々なデータを地図と組み合わせ、カスタマイズできるのが特徴だ。気象、人流、津波浸水想定域、選挙の支持率などのデータを重ねることで、視覚的にわかりやすく情報を届けることができる。

ビッグデータを扱っても遅延が少ないことや表現力、直感的な使用感がＭａｐｂｏｘの強みだという。

ハンズオンではＮＡＳＡが公表している隕石の衝突データを地図上に落とし込み可視化した。（事務局）

### 調査報道③ 官民連携事業の闇を暴く

**7・15／講師：横山勲 河北新報福島総局記者／出席：会場６人、ウェブ20人**

**■特ダネは気づきから**

横山記者は、官民連携事業を担う民間企業が小さな町を食い物にしようとする実態を暴いた。

「ちょっとずつ浸食して行政機能をぶん取る」「地方議員はみんな雑魚」「超絶いいマネーロンダリング」

民間企業の社長の生々しい発言が収録された音声データを入手し、紙面記事だけでなくユーチューブで音声を公開。その後、社長は辞任した。

この問題にからみ今まで出した記事は40本以上。現在は、なぜこのような問題が起きたのか、自治体行政の在り方に焦点を当て取材を続けているという。

この特ダネは「町幹部の給与問題」という全く別の問題を追っていた際、議会の議事録に不審な点を見つけたことから始まったという。目の前にあるものをそのまま受け入れるのではなく、気づき、疑問を持てるかが重要だと感じた。（事務局）

# 2023年度日本記者クラブ賞・特別賞 受賞記念講演会

一般からの参加を含め、参加人数は、6月30日（特別賞）は会場18人、ウェブ34人、7月10日（クラブ賞）は会場26人、ウェブ30人。

## ●事実の発掘と検証 不可欠

### クラブ賞 西野智彦さん

（TBSテレビ）



1989年から、時事通信・日銀クラブで一緒に激動ニュースを追った。西野記者は多角的な情報収集で特ダネを連発。「ファクトの発掘」はこの時代に培われたであろう。

TBSに移ってからも、財政金融政策の決定過程に挑み、多くの著作を出した。最新作では50年前のニクソンショック時を解明。社会に警鐘を鳴らすジャーナリズムの本来の姿と言える。チャットGPTなど生成AIが及ばない世界で、いつの時代も記者によるファクトの発掘と検証は不可欠だろう。

歴史の教訓として、記念講演で指摘したのは我が国の金融通貨政策の〝悪弊〟2例である。

（1）強い政治リーダーが掲げる目標に金融政策が追随しがちな点。佐藤・田中内閣時の「円切り上げ阻止」、中曽根内閣時の「国際協調路線」、安倍内閣時の「デフレからの脱却」を列挙、「前2回は狂乱物価とバブルを招いた」と批判した。

（2）調査部門が企画部門に従属しがちな点。70年代には「金融緩和しても物価は上がらない」との政治家の主張に対抗できなかった。「黒田異次元緩和」時には「2年で2％の物価安定目標を達成できる」と宣言したが達成できず、6回も先送り。「金融政策の独立」は形骸化した。

植田体制で「異次元緩和」の正常化が可能かとの問いに、「極めて細いパスだが絶望はしていない」と展望した。

時事通信出身　八牧　浩行

## ●地域と共に次のステージへ

### 特別賞「RSK地域スペシャル・メッセージ」取材班

（山下晴海 RSK山陽放送報道制作局長）



「メッセージ」は2012年4月に水曜のゴールデンタイムで放送を開始、これまでに250本以上のドキュメンタリーを発信し続けている。老老介護、地域医療、豪雨被害、ハンセン病など地域の今を切り取るテーマは、山下局長が「瀬戸内海の島は日本の縮図」と語る通り日本全体が抱える課題を映し出したと言える。

視聴率重視で深夜に追いやられがちなドキュメンタリーをあえてメインストリートで発信するのはなぜか。開始当時、原憲一社長はドキュメンタリーこそ視聴者に見てもらえる時間に放送するべきだと常々口にしていたという。「視聴率に右往左往するな」と番組を支えたスポンサーの存在も大きかったそうだ。いまだどの局もなしえない編成を10年以上続ける志の高さに背筋が伸びる思いだ。

さらにRSKは、取材を重ねた県内3カ所のハンセン病療養所を人権学習の場として世界遺産に登録する活動を広げている。「番組で地域の課題を掘り下げるだけではだめだ」と山下局長は次のステージを見据える。その言葉は、メディアの変革のもとローカル局が地域と共に生き続けるためのまさにメッセージに聞こえた。

静岡放送東京支社次長兼報道編成部長兼ビジネスセンター業務担当　鈴木　宏典

## ●「資料は誰のものなのか」

### 特別賞　免田事件資料保存委員会

（写真左から高峰武さん、甲斐壮一さん、牧口敏孝さん）







日本で初めて死刑囚が再審無罪になった免田事件を40年余、取材してきた先輩たちである。罪を着せられた故免田栄さん、妻玉枝さんから5年前、膨大な資料を託されたのが委員会活動のきっかけだ。改めて実相に触れた3人は「驚きの連続だった」。整理・保存の成果は、粘り強い検証と記録の大切さを教えてくれる。

「冤罪の防止に役立て、若い人に伝えてほしい」というのが免田さんらの願いであった。原資料の確認にもこだわったという。最初の再審請求書を目にしたエピソードが印象的だ。閲覧は申請から1年もかかり、熊本地検の狭い部屋で、職員の立ち会いで書き写さなければならなかった。「資料は誰のものなのか」と訴える高峰氏の言葉は、多くの冤罪事件で再審をかたくなに拒み続ける検察の姿勢を問い質すものだろう。

「権力と一人で戦った免田さんの希有な生き方には、もっと学ぶことがある」。そして、地方の報道機関でも「普遍という岩盤に到達する道は必ずある」と語ってくれた。地方紙に身を置く後輩の端くれとして背中を押されているようだった。

熊本日日新聞社東京支社編集部長　小多　崇

# ロシア軍の内情に迫るNスペ
# 急きょ「ワグネル反乱」に
# 不測の事態に備え生放送

鴨志田　郷（NHK国際部デスク）

「ショイグ！ゲラシモフ！銃弾はどこだ！」

「我々は裏切りに直面している！祖国を守るため厳正に対処する！」

怒りに顔を歪めて吠えるプリゴジン氏と、青筋を立ててにらみつけるプーチン大統領。カメラ目線の二人の鬼の形相は、ロシア内部の対立の根深さを白日の下にさらし、世界は息を殺して反乱の行方を見守った。

## 編集作業大詰め そのとき…

軍事侵攻開始から500日目に向けて、NHKではモスクワ支局やキーウ取材班が日々の情勢や戦況を追う傍ら、ウクライナの反転攻勢の前に立ちはだかるロシア軍の内情に迫るNHKスペシャルの制作を目指していた。番組取材班は半年以上にわたり、衛星画像などで戦況を分析する内外の専門家と連絡をとりながら、ロシア軍の捕虜や離反兵への支援を続けるフランスに拠点をおく団体を通じて、各地に身を潜める元兵士たちとも接触するようになっていた。この間、取材班が訪れた国は、ウクライナを含め10カ国以上に上る。

「ワグネルの乱」が勃発したのは、そんな番組の放送を一週間後に控え、編集作業が大詰めを迎えた、まさにそのときだった。

この反乱は何をもたらすのか？「プーチンの軍隊の実相」を描く番組の中で、この内紛をどう位置づけるべきなのか？　制作陣は途方に暮れた。



右/Telegram channel of Concord group/AFP/アフロ
左/Russian Presidential Press Service/AP/アフロ

このとき、すでに各国に散っていたワグネルの元戦闘員たちとの間で信頼関係を築いていたことが功を奏し、オンライン取材でも反乱に至る生々しい証言を得ることができた。

「プリゴジンはある時期から眼前のウクライナ軍以上に、モスクワの国防省への敵意を抱くようになっていた」

「反乱前夜、決起に加わらない兵士は処刑するとすごむ上官もいた」

浮かび上がってきたのは、ウクライナ軍を相手にともに死闘を繰り広げながら、いがみ合いを深めていたロシア国防省とワグネルの確執だった。

さらに私たちを驚愕させたのは、行軍を止め撤退するワグネルの部隊を、市民が歓声を上げて見送る映像だった。国際社会から「ならず者の狂気の集団」と目されていたワグネルは、実は激戦地のロシア系住民の多くから英雄視されていたのだ。

編集室での連日連夜の議論の末、番組は、ロシアの内紛に至るまでの詳細な経緯を描いたうえで、欧米の支援を受けたウクライナ軍を前に攻守が逆転し、長期戦を見据えて「仕切り直し」をはかるロシア軍の変貌にも迫り、この戦争の「現在地」をありのままに伝える方向へと舵を切った。

そして命がけで取材に応じた関係者の身の安全を最優先にしながら、慎重に編集作業が進められていった。

さらに不測の事態に備え、番組は急きょ生放送で構えることになり、スタジオではオンエア直前まで、スタッフたちの怒声が飛び交った。

「プリゴジンの所在はまだ確認されていないのか？　本当にベラルーシで保護されているのか？」

「軍幹部にも反乱に加担した者がいたという情報は正しいのか？」

## ロシアの深い闇を前に

番組の放送を終えた7月10日、騒乱のほとぼりが冷め始めていた頃、ロシア大統領府は、蜂起の5日後にはプーチン大統領がひそかにプリゴジン氏をクレムリンに招き、長時間会談していたと発表した。鬼の形相で世界を凍りつかせた二人は、このときいったいどんな面持ちで向き合い、何を話し合ったのか。「ロシアの闇」の深さに、またしてもめまいを覚えた。

果たして世界はこの戦争の出口に近づいているのか、それとも出口はますます遠のいているのか。

そう問い直さずにはいられない。

かもしだ・ごう▼1993年入局　神戸放送局　国際部記者　エルサレム　ロンドン　パリ　ニューヨークの各特派員を経て　国際部デスク　ニュース7の編責やNHKスペシャルの制作統括を務め　現在は解説委員を兼務

## 6月の衆院解散見送り

# 真相は「できなかった」

## 直前までタイミング模索か

水内　茂幸（産経新聞社政治部次長）

岸田文雄首相は6月21日の通常国会会期末までに衆院解散するのか―。この数カ月、多くの政治記者の最大の関心事ではなかっただろうか。

首相が次の自民党総裁選を無難に乗り切るためには、次の衆院選に勝ち、「選挙に強い」という印象を残すことが重要だ。首相は5月の先進7カ国首脳会議（G7広島サミット）を成功裏に終え、6月13日には新たな少子化対策「こども未来戦略方針」も閣議決定した。再来年10月の衆院議員任期満了まで2年以上残していたが、現段階で野党の選挙準備が整わないことも合わせれば、首相は6月に解散の照準を定めてきたと考えるのが自然だろう。



6月15日夕刻、首相官邸のエントランスで解散の見送り表明をする岸田文雄首相（産経新聞社提供）

しかし、サミット直後には、首相の長男、翔太郎氏が公邸の公的スペースで親族と写真撮影した問題が発覚。健康保険証とマイナンバーカードを一体化した「マイナ保険証」を巡るトラブルも顕在化し、内閣支持率は5月末から急降下を始めた。

### 万一に備え予定稿用意

さあ、どうするか。後輩記者には「今こそ真価が問われるぞ」と説き、関係先の個別取材を徹底させる一方、私自身もデスクワークの隙間に旧知のネタ元を訪ね歩いた。

官邸筋には、この時期の解散に「大義がない」という声が多く、首相が重視した防衛費増額の財源を確保するための特別措置法さえ成立できれば、解散すべきでないという慎重論が多かった。首相に近い麻生太郎副総裁も、周囲に「解散はない」と伝えたとの情報も入ってきた。

ところが、首相と5月末に個別会食したという自民幹部を訪ねると、日本酒を手酌であおる首相から、こんな話を聞いたと打ち明けられた。

「これまで防衛力の強化や原子力発電所の活用など、日本が先送りできない課題にコツコツ取り組んできた。立憲民主党が内閣不信任決議案を提出しても、しっかり対応できるようにしておかなければならない」

「しっかり対応」とは、衆院解散への準備にほかならない。この幹部は「俺も解散の慎重論者だったが、やる気をにじませる首相に驚いた」と振り返った。

首相は解散の選択肢も捨てていない―。6月13日の記者会見では、衆院解散の可能性を問われ、微笑を浮かべながら「会期末間近になっていろんな動きがあることが見込まれる。情勢をよく見極めたい」とも言及した。解散を否定しなかったことを受け、永田町には浮足立つ議員が増えた。わが社も予定稿の用意など、万一に備えた準備を進めた。

最終的に首相はこの2日後、記者団の前で「今国会で解散しない」と宣言。周囲には、早期解散を嫌う立民が、防衛財源確保法の成立後まで不信任案の提出を遅らせるとの情報をつかんだことを理由に挙げ「作戦通りうまくいった」と自賛もした。

本当に作戦通りだったのだろうか。ある現職閣僚は「あらゆる政治スケジュールが6月解散を念頭に組まれたと感じていた」と振り返る。総裁選の再選戦略上は最適のタイミングだっただけに、首相は直前まで解散の可能性を探ったが、できなかったというのが実態ではないか。

### 穏やかそうで実は頑固

私はかつて自民岸田派や外務省担当として首相の番記者を務めた経験がある。首相は穏やかそうで、実は頑固な人だ。自民党総裁の2期目を目指すかどうかも「自分がやりたいことをやり切って、後は周りがどう評価するかだ」と直接聞いたことがある。6月解散を見送ったことが首相の将来にどう影響するか―。周囲の心配をよそに、本人は意外とひょうひょうとしているのではないか。

みずうち・しげゆき▼1999年入社　水戸支局　秋田支局などを経て　2005年から政治部　与野党を幅広く取材し　自民党の谷垣禎一元総裁や大島理森前衆院議長らの番記者を務めた　現在　政治部統合編集担当次長

新・列島報告74　岩手県
米NYタイムズ効果で観光客増

# MORIOKAに熱視線
## 市民は喜びより驚き

刈谷　洋文
（岩手日報社報道部経済キャップ）

岩手県盛岡市の中心市街地を歩く外国人観光客の姿は、もはや見慣れた景色になりつつある。5月の大型連休中はわんこそばやじゃじゃ麺、盛岡冷麺の人気店に午前中の早い時間帯から行列ができ、居酒屋では多様な言語が飛び交った。

1月に米ニューヨーク・タイムズ紙の特集「2023年に行くべき52カ所」に盛岡が選ばれた効果は絶大だった。ロンドンに次いで2番目に「東京から新幹線ですぐ行ける、人混みなく歩いて回れる宝石的スポット」として紹介された。

当初の地元住民の反応は、喜びよりも驚きが勝っていた。「なんで盛岡が」「何もないのに、来てもらってがっかりされないだろうか」。謙虚な県民性もあるのかもしれないが、暮らしている立場からすると、分不相応にも感じる取り上げられ方に困惑が広がった。

### ■「博物館にはならないで」

タイムズ紙に記事を寄稿したクレイグ・モドさん＝米国出身、神奈川県鎌倉市在住＝は、盛岡について▽市街地から岩手山を望む景観など、自然豊かな中規模都市で独自の文化が息づく▽歩いて街を回る楽しみがある▽東洋と西洋の建築美が融合した歴史的建造物が残る▽個性豊かな店と意欲的な店主が多い―など理由を挙げ、住民が漠然と感じていた暮らしやすさや魅力を外部の視点から適切に言語化してくれた。

取材時も「盛岡は人々の活気と歴史が地域に息づき、今のままが最高に素晴らしい。観光に特化した博物館のような街にならないでほしい」とエールを送ってくれ、多くの住民が古里への誇りや愛着を深めた。

記事の反応はすぐに現れ、大型連休中の人出は、盛岡駅前周辺が前年比で20・3％増加し、全国3位の伸び率を記録した。外国人だけでなく県外観光客の注目も集め、同月の盛岡の宿泊観光客数は新型コロナウイルス禍前の数字を上回る約10万9千人。農耕馬が豪華衣装をまとい、鈴の音を鳴らしながら練り歩く伝統行事・チャグチャグ馬コにも、過去最多の22万3千人の観覧者が訪れた。


多くの観光客や住民が見守る中、盛岡市中心部を練り歩くチャグチャグ馬コ（6月10日／岩手日報社提供）

### ■喫茶文化など強みに磨きを

特需ともいうべき宣伝効果を受け、県や市は観光案内所の増設、現地の日系コミュニティーと連携してニューヨークでわんこそば大会を企画するなど多様な施策を展開している。ただ、ニュースの賞味期限はそこまで長くないはずだ。一過性ではなく、今後も盛岡を観光の目的地に選んでもらうためには地元の人間がきちんと強みを把握し、磨きをかけていくことが重要だろう。

記事でも紹介されていたが、個人的に着目しているのは根強い喫茶文化だ。歴史ある純喫茶やUターンで戻った若者が開業したカフェなど趣ある個人経営店が数多い。コーヒー店を集めた催しが人を集めすぎて周囲に渋滞を引き起こす、店主が高齢となって廃業するはずが常連客が店を引き継ぐ、などエピソードは枚挙にいとまがない。有名コーヒーチェーンが撤退しても、個人店は新陳代謝しながら残り、住民の多くがお気に入りのスポットを持っている。

定番の観光と違うかもしれないが、街を歩いて好みの喫茶店を見つけてもらうような独自な形があってもいい。こだわりコーヒーのお供には、濃厚な「チロル」のチーズケーキ、生地がふわふわな「福田パン」のあんバターもおすすめしたい。

ここまで読んでいただいた皆さま、多少は盛岡に興味が湧いてきたのではないでしょうか。魅力は書き尽くせません。これ以上はぜひ、現地に足を運んでお確かめください。ちなみに居酒屋専門の同行ガイドは、弊社にもたくさんおります。

かりや・ひろふみ▼2004年入社　遠野支局長　宮古支局長　報道部市政キャップなどを経て　23年4月から現職

被災 防災 減災

熱海土石流から2年

最前線㉓

# 公文書8000枚 真実探る

## 被災者の「なぜ」に応えたい

和田　啓
（静岡放送報道部）

発災から1年半以上が経過して見つかったのは高齢女性の前腕部の骨だった。「おかえり、寒かったね。よく頑張ったね。出てきてくれてありがとう」。息子は、無言の帰宅となった母親の骨に声をかけた。

2021年7月3日に発生した熱海土石流災害。流れ下った土砂が民家を襲う衝撃的な動画がSNSで拡散され、私たちは初めて土石流のリアルな恐ろしさを思い知ることとなった。異質だったのは、大量の土砂の正体が人工的に造られた違法な盛り土だったこと。15㍍の規制を超えて50㍍にまで積みあがっていた土砂が10年以上も放置され、大雨をトリガーに一気に崩れたのだ。その人的被害を報道は常套句のように「27人死亡、1人の行方が分かっていません」と伝え続けてきた。行方不明となっている高齢女性の捜索に警察は延べ2万人以上を動員。50㍍プール100杯分にも及ぶ土砂の中から手掛かりを探していた。その間、私は女性の息子と手紙のやり取りを続けた。多くの被災者が〝人災〟だと訴えて裁判での責任追及に向かっている中、息子は「まだ気持ちの整理がついていません」とつづった。

そして今年1月、堆積する土砂をふるいにかける作業も区切りを迎えるタイミングで骨片が見つかった。DNA鑑定の結果が警察から伝えられた日、息子は「やっと出てきてくれた。骨一本ですけどちゃんと供養してやれる」と、涙ながらに初めて母への思いを語った。

### ■業者も行政も責任認めず

なぜ盛り土崩落を防げなかったのか。被災者の疑問はそこに集約されていた。私は盛り土造成の背景を探る調査報道に舵を切り、工事の申請から崩落までの約15年分、8000枚に上る公文書を読みあさった。公文書は個人名などが黒塗りとされたため、文書の前後関係や現地での関係者への取材などから一つ一つピースを埋めていく地道な作業を繰り返した。時には、土を運ぶダンプ業者に怒鳴られたり暴力団に近い人物に接触したりと危険を感じる取材も少なくなかったが、最後には盛り土造成の本丸とされる不動産業を営むA氏とのコンタクトに成功する。ただ、取材許可をめぐってはA氏の部下数人とA氏雇われの複数の弁護士がそろう現場に単身で乗り込むなど、人生で経験のない緊張の日々が続いた。およそ3カ月の交渉の末、カメラの前でA氏が口を開く。「私は名義だけ。私は冤罪を受けようとしている」。責任を真っ向から否定した。



土石流による建物被害は136棟に上った
（2021年7月3日/熱海市伊豆山/静岡放送提供）

発災後も土石流の起点に崩れ残った盛り土が危険な状態だったため、県は行政代執行によって土砂を撤去。総事業費11億円はA氏に請求するつもりだが、発災2年の当日、A氏は「全く払うつもりはない」と話した。

責任を否定し続けているのは、行政も同じだ。盛り土の造成は、不備の書類を熱海市が受理したところから始まった。県も危険性を認知しながら有効な手立てを打てず、結果的に放置した。私は当時の音声データを入手し、行政側がA氏の怒鳴り声に言いくるめられる様子や「このままだと人災になる」という工事関係者からの警告を職員が聞き入れなかった実態を報じた。事なかれ主義の最たるものが浮き彫りとなったが、道義的責任と法的責任は違うという理論で行政側はA氏などとともに裁判の被告となり、被災者らと対峙している。

### ■いまだ217人が避難生活

災害時における報道は、目の前の起きていることを描写するのに労力を費やす。もちろん大切なことだ。しかし、被災者や遺族が発する〝なぜ〟に応えられたとき初めて報道の役割を果たしたと言えるのではないか。慰霊祭で遺族の1人は「頑張ってくれてありがとう」と声をかけてくれた。被災者に寄り添う意味を、調査報道を通じて具体化できた気がした。

2年がたった今も被災地は立ち入り禁止の「警戒区域」のまま、124世帯217人が避難生活を余儀なくされている。

わだ・ひらく▼2014年入社　カメラマン　社会部　静岡市政などを経て現在は県政を担当

私が会ったあの人

# 菅原幸助さん 中国残留孤児支援に奔走
# 贖罪で走らせた「避難列車」

鈴木　達也（神奈川新聞社）

日本人に多い姓は佐藤さん、鈴木さん、高橋さんが上位という。「菅原さん」は50番目にも入らないらしいが、不思議なことに永住帰国した中国残留日本人孤児の中には比較的多くいる。

菅原幸助さんという人の関わりが大きい。ちょうど10年前に88歳で亡くなるまでの後半生を、ひたすら孤児支援にささげた。

旧満州（中国東北部）に取り残された孤児たちは、日中国交回復（1972年）を機にやっと帰国がかなうようになった。顔写真や断片的な情報を伝える「肉親捜し」のニュースをご記憶の人も多いだろう。制度は少しずつ改善され、やがて肉親が判明しなくても帰国できるようになっていく。

## ■私財投じ就籍に尽力

ところが肉親未判明者は帰国しても名乗るべき姓を知らない。幼いころに親と生き別れたのだから当然である。頼ったのが、私財も投じて就籍（日本国籍取得）に取り組んでいた菅原さんの姓だった。「菅野」「菅沼」など一部を借用した人も少なくない。

国賠訴訟原告団の代表相談役だったころに知り合った。連載企画で取り上げるために残留孤児を紹介してもらうつもりだったが、話を聞くうちに菅原さん本人に焦点を当てることにした。菅原さんにとって孤児支援は「贖罪」活動なのだと知ったからだ。

昭和改元の前年に山形県に生まれ、大農場経営を夢見て満蒙開拓青少年義勇軍に志願した。14歳で意気揚々と大陸に渡ったが、「満州国」はご存じのような末路をたどる。関東軍に徴兵されていた菅原さんはソ連参戦を受けて急きょ憲兵に任じられ、日本人を本土に帰還させる「避難列車」の警護役を命じられる。当時20歳。

新京（現長春）駅で乗車できたのは「乗車証」を持っている高位高官とその家族だけで、民間人は後回し。水の補給のため川の近くで列車を停めた際に襲撃を受け、車外に出ていた母子を置き去りにして出発させたことも告白してくれた。



孤児調査で旧満州を訪ねる菅原さん。車窓から「赤い夕日の大地」を見つめていた（2005年4月/筆者提供）

定年退職後、孤児支援に奔走することになる。「命令とはいえ、僕は政府の『棄民』に加担したんですよ。置き去りにしたあの子が、もしかしたら残留孤児と呼ばれる人たちなのかもしれない」。取材中に何度も菅原さんの口から発せられた言葉だ。

２００４年に長期連載をいったん終えた後、一緒に中国を訪ねた。国賠訴訟の資料収集の一環で、弁護士たちも同行。旧満州の各地を巡り、孤児を育ててくれた養父母の聞き取り調査をした。

## ■「戦後は終わっていない」

忘れられないシーンがある。瀋陽（旧奉天）の調査を終えた時のことだ。中年女性が駆け寄ってきて、息を切らせながら「私も置き去りにされた孤児なんです。日本に帰りたい」と中国語で訴えてくる。真偽は分からないが、菅原さんは「戦後は終わっていない」とため息をついた。

国賠訴訟は、帰国の機会を奪われた上に永住後も国が十分な支援をしなかったと訴える孤児たちが起こした。最終的には玉虫色の政治解決になり、原告には不満もくすぶった。菅原さんは憤りを込めて記録集を出版。思いの丈を書きとめて世を去った。

菅原さんの活動は、時を超えて残留孤児たちに差し向けた「避難列車」だったのだろうと思っている。

（すずき・たつや　１９９０年入社　報道部長　編成部長　編集局次長などを経て　現在　論説主幹）

次号は桑原健さん（日本経済新聞社）にバトンが渡ります。

# 8・12日航ジャンボ機墜落事故
# 「御巣鷹山」の誤報 正せず悔い
# 1・7キロの距離 報告したが――



滑志田　隆（なめしだ　たかし）

1951年神奈川県生まれ　78年毎日新聞社入社　甲府支局　東京社会部（環境庁　通産省　農水省）　都内版デスク兼社会部編集委員　科学環境部　地方部副部長　山形支局長　人口問題調査会部長委員を経て2008年退社　～15年国立情報システム研究機構客員教授　国立森林総合研究所常勤監事　～19年内閣府みどりの学術賞選考委員　現在　国土緑化推進機構事業評価委員　農水省国有林野技術開発検討委員　緑の認証会議評議員　Ph.D（政治学）　著書に『地球温暖化問題と森林行政の転換』

8月の空を仰ぐたびに、あのすさまじい現場を思い起こす。赤茶けた地面に焦げ跡が広がり、航空機の残骸が散乱していた。毛布にくるまれた遺体が次々に空輸されていく。1985（昭和60）年8月15日朝、私は群馬県上野村の日航ジャンボ機墜落事故の現場にいた。死者520人、生存者4人。未曽有の事故発生から4日目。写真部員と共に急ごしらえのテントで寝泊まりした。

自分が今、どこにいるのかを正しく知ることが現場記者の第一の務めだが、その基本動作ができなかった。地図を持参したにもかかわらず、私はジャンボ機墜落の位置を「御巣鷹山」とする誤報を発し続けた。その修正に真摯に取り組まなかった。慙愧に堪えない。

8月12日午後6時12分、大阪行きの日航123便が羽田を離陸した。12分後に相模湾上空で衝撃があり、垂直尾翼を失った。同6時56分30秒、群馬・長野県境の山に墜落した。第一報は時事通信。マスコミの初動ぶりは朝日新聞社会部編『日航ジャンボ機墜落・朝日新聞の24時』に詳述されている。

私は13日深夜、毎日新聞の第2陣として群馬県上野村へ。翌14日未明から前線本部の高尾義彦キャップの指揮下に入った。村役場や県警の現地対策本部を取材し、ぶどう峠で無線連絡を中継した。すでに「現場は御巣鷹山」の誤解が蔓延していた。15日早朝、本社ヘリで山中の事故現場に降り、先陣の萩尾信也記者と交代した。

## ◆「蜜柑の皮むき」禅問答

よく出来たテントだった。萩尾君が自衛隊から提供されたビニールシートやロープと焼けた木々を組み合わせて作った。その技に感心した。機体の残骸の中を歩き、遺留物の模様などを記事にした。コックピット近くの焦げたカラマツの根元に、少女のひらがなの名が書かれた白い帽子が掛かっていた。暗転して消えた「夏休み」に胸が痛んだ。

その深夜、大型無線機の出力が急に改善し、社会部デスクと直接のやりとりが可能になった。「他社に気づかれないように行動し、現地の事故調に当たれ」との指示だ。漆黒の闇の中、ヘッドランプだけを頼りにスゲノ沢上流部まで下りた。その頃、東京本社では運輸省詰めの菊地卓哉記者らが「事故原因は後部隔壁破裂」の特報に取り組んでいた。「カクヘキ」という言葉を事故調に当て、「反応をうかがう」のが現場記者に与えられた任務だった。

青シート張りの内側から出てきた事故調の二人組に食い下がった。やっと得たのは「蜜柑の皮むき」という禅問答のような答えだった。破裂してめくり上がった状態を意味していたが、実は私は「隔壁」がいかなるものかを知らなかった。本社の勝又啓二郎デスクに報告。同氏は「ウラがとれたかもね」と言ったが、詳しい内容を教えてくれなかった。

## ◆「ここはタカマガハラヤマ」

夜が明けた。前日から再三、5万分の1の地図「十国峠」と2万5千分の1の「浜平」を参照していた。自分の位置が〝御巣鷹山〟のかなり南方であることを確信した。しかし、具体的に〝どこ〟なのか不明だ。そこは地図の端だった。

現場を見に来た二人連れの森林組合の老人と遭遇した。「私たちはどこにいるのか。教えてください」と迫った。一人が「ここはタカマガハラヤマの東。御巣鷹山はずっと北だ」と言う。「ここは御巣鷹山ではない

んですね」と念押しすると、他の一人が「この辺りのあちこちを、御巣鷹山と呼ぶ」と曖昧なことを言う。昔から献上鷹や矢羽根の採取を目的に鷹を捕獲する場所だったという。

3泊を過ごした朝、米国運輸安全委員会（NTSB）やボーイング社の技術者が多数で現地入りした。B747型の事故機を製造し、修理したのは米国側である。原因解明に向けて重要な動きだ。後ろ髪を引かれながら、交代要員の記者と入れ換わりに本社ヘリに搭乗した。本当の御巣鷹山（標高1639㍍）が遥か北の方角に見えた。

本社に上がり「現場は御巣鷹山ではない」と報告した。その時、サブデスクに言われた言葉を忘れない。「お前さんも面倒くさいことを言うじゃないか。一社で取り組む話ではない」。小さな金属破片と共にメモを提出した。①地図で確認する限り、御巣鷹山は現場から北に約2㌔（実際には1・7㌔）離れている。②現場は山頂ではなく、南から北に下る尾根。標高は1550㍍ぐらい。③強いて言えば三国山（標高1834㍍）から続く山系。④直近のピークは〝タカマガハラヤマ〟と呼ばれるが、地図に山名はない。⑤昔から鷹を捕獲する場所だったので、〝御巣鷹山〟と呼ぶ人もいる。



墜落現場で遺体の捜索活動をする自衛隊員（1985年8月15日／群馬・上野村の御巣鷹の尾根／時事通信社提供）

### ◆「県警は発表していない」

デスクも困惑顔だった。「結局、警察は何て言っているんだ」と問う。「群馬県警は〝御巣鷹山と三国山の中間地点〟と言うばかり」と答えた。その時、現地の記者から「こちら山頂より」という無線が入り、私が原稿を取った。現場の呼称についてやりとりしたが、「警察が〝御巣鷹山〟と発表しているんだから」と怒った口調だ。サブデスクは「そら、見ろ」と言い、議論は終わった。

「高天原山（標高1979㍍）」を確定し、地図付きで報告できなかったことは、現地から帰投した私の明らかな怠慢だった。架空の〝警察発表〟は現場の確認作業を回避する逃げ口上であり、私もそれに安居した一人であった。

9月下旬、前橋支局長を通じ群馬県警から原稿を依頼された。墜落事故対策の教訓を特集するという。県警は「行方不明の記者の捜索」騒動に反省を求めたかったようだ。

「現場を御巣鷹山と発表したのは群馬県警の痛恨のミス。歴史に残るほど責任は重い」と書いた。案の定、強烈な抗議電話があった。警務部の責任者は「あらゆる資料を総点検したが、群馬県警が事故現場を御巣鷹山と発表した事実はない。〝発表〟部分の削除を求める」と語気荒かった。けんかになった。「こちら（県警）が事実ではないと指摘しているのに、強弁するならば証拠を示してほしい」と迫られ、私は削除を応諾した。「御巣鷹山」発表は〝幻〟だった。

その「上毛警友・日航機墜落事故対策特集」が出版されたのは11月。拙稿はファクスがにじんで日付に狂いが生じて惨憺たる内容だった。が、約50人が執筆した特集の内容は記録性にあふれる。中曽根康弘首相の「激励」も掲載してA5版130頁。現場の表記は「高天原山系の無名尾根」に統一されていた。

当時の河村一男県警本部長は19年後の2004年8月、『日航機墜落――123便、捜索の真相』を出版した。「墜落現場は御巣鷹山ではない」と繰り返し訴えた。「（県警発表の）御巣鷹山と三国山の中間点は決して御巣鷹山ではないのである」「誤りも甚だしい。初歩的ミスもいいところである」「伝聞の過程で情報が歪んでいく様子がよくわかる」とマスコミへの怒りの言葉を連ねた。

北緯35度59分54秒、東経138度41分49秒。標高1565㍍。事故現場は黒澤丈夫上野村長の発案で「御巣鷹の尾根」と呼ばれている。しかし、国の運輸安全委員会が2011年に公表した「報告書解説」の表題は「御巣鷹山墜落事故」を踏襲し、況や「高天原山」ではない。

### ◆定着した誤報　正す難しさ

事故現場の位置が人々に正しく伝わらなかったことは、世界最大の航空惨事のもう一つの不幸であろう。現場入りした報道関係者は1カ月間で約300人に上ったが、虚構の「御巣鷹山」を正すことができなかった。定着した誤報は修正し難い。視点を一寸変えると、まことに恐ろしく思われる。

この夏もまた墜落事故で亡くなった方々のご冥福を祈る。新聞記者としての忸怩たる思いを抱きながら…。

# 水曜日は政治家を招いて
## 放送人政治懇話会の58年

鈴木　勝利（毎日放送出身）

放送人政治懇話会の例会は、5月17日に２２００回を数え、遠藤利明自民党総務会長がゲストだった。この会は放送業界に特化した勉強会では最も長い歴史を有している。放送人政治懇話会、以下「放政懇」の設立は１９６５年10月。日韓条約が大詰めを迎え、ベトナム報道をめぐって政府と報道機関との摩擦が激化していた時代だった。テレビ報道に危機感を持った佐藤内閣はテレビ各社と日常的な関係を強化する必要があると判断、朝日新聞ＯＢでＴＢＳ解説委員の若宮小太郎らに働きかけて設立された。

### ■初回　佐藤総理のマスコミ観

新聞各社が放送メディアを支配していた時代で、設立メンバーは毎日新聞の高橋武彦、読売新聞の宮崎吉政、朝日新聞の山田英三など新聞社各社の論説委員が中心だった。会の趣旨は「放送関係者がその時々の時事問題について直接当事者から包み隠すことのない真実を聞いて正しい時局認識をもち公正的確な放送の使命を果たそう」としている。

第1回の会合のゲストは佐藤栄作総理大臣で、放送局側は報道局幹部の他に地方局では社長など70人が出席、当時のヒルトンホテル（84年からキャピトル東急ホテル、現在はザ・キャピトルホテル東急）で開かれた。佐藤総理はこの会合で「マスコミといっても、私は新聞より放送を重視している。放送では報道ではなく娯楽番組を重視している」と述べ、さらにベトナム、日韓、デモでの扱いについてテレビニュースのチェック体制に疑問を呈した発言をしている。このようなテレビ報道に対する認識は当時の政治の側では一般的だった。

この年は12月までに12回開催。田中角栄自民党幹事長、金東祚・韓国大使、江田三郎社会党衆院議員、橋本登美三郎官房長官、ライシャワー米大使、岩井章総評議長、赤城宗徳自民党政調会長、福島慎太郎前国連大使、岸信介元総理、藤山愛一郎経企庁長官、福田赳夫蔵相、西村栄一民社党書記長がゲスト。会員社も30社以上に増えて、これ以降毎週水曜日の例会が定着した。

### ■現役世代中心の体制へ移行

１９９７年はこの会の存続の危機の年だった。バブル崩壊の影響で民放各社の経営悪化とそれに伴う会員社の減少、例会の参加者数の減少や日常的な運営への困難さなどで解散も検討される事態となった。こうした中、宮崎代表の呼びかけでこれまで運営にあたっていた今井久夫（元産経新聞論説委員）、浅川博忠（政治評論家）、太田博夫（元朝日新聞）それに事務局として経理を担当していた菊野博（元日本テレビ）、現役世代から神志名泰裕（ＮＨＫ）、菱山郁朗（日本テレビ）、川戸惠子（ＴＢＳ）、船田宗男（フジテレビ）、川内一誠（テレビ朝日）、西山弘道（文化放送）、鈴木勝利（毎日放送）などが出席、会を存続するかどうかの話し合いがプレスセンターで開かれた。宮崎代表はこの会を解散する文書も用意していた。一方、現役世代からは毎週政治家と会合を持てるのは有意義で続けてほしいと存続を求める声が相次ぎ、結論として運営体制を見直して会を続けることが決まった。

98年から現役世代が事務局の業務を担う新しい体制がスタート、これ以降、運営主体は現役世代に引き継がれていくことになった。

２００６年、キャピトル東急ホテル（当時）の建て替え工事が決まり、会場と事務所を新たに設置することが必要となった。国会に近いホテルも考えられたが、金銭面だけでなくレギュラーで会場が確保できることを考慮して現在のプレスセンターに決まった。開催時間も現在の午後2時30分から4時になった。キャピトル東急ホテルの最終回は、同年11月20日。１６４５回でゲストは河野洋平衆院議長、演題は「内外情勢とこれからの日本」だった。

そしてプレスセンターでの初めての例会は、06年11月30日、１６４６回で中曽根康弘元総理がゲスト。演題は「日本政治の針路を展望する」だった。この年は40回の例会を開催、その後は若干の変動があるが例会は年間35回程度で推移してきた。

現在、放政懇はＮＨＫ、東京の民放テレビ5社、読売テレビの7社の現役世代の世話人がゲストの選考を担当、毎週水曜日の午後2時30分から開催されている。登録会員は会員社のＯＢ・ＯＧ、現役で約１００人。例会出席者は30人前後で夏休み明け8月23日再開の予定。

## マイBOOKマイPR

### 『金正恩の核兵器　北朝鮮のミサイル戦略と日本』

井上　智太郎（共同通信社ニュースセンター整理部長）

**北朝鮮の核ドクトリンを読み解く**

米本土に届く大陸間弾道ミサイル（ＩＣＢＭ）と水爆の製造能力を獲得した北朝鮮が、今度は「使える核」とも評される戦術核の量産を表明した。標的は日韓と駐留米軍。核はもはや瀬戸際外交の道具ではなく、実際の戦力として組み込まれつつある。ソウル、ワシントン、北京での取材を基に、新興核保有国、北朝鮮の虚実交えた生き残り戦略を読み解き、核兵器使用をいかに封じていくかを考察した。




筑摩書房
1,034円

### 『安倍「一強」の完成　ドキュメント 平成政治史４』

後藤　謙次（共同通信出身）

**いかに「一強体制」は完成したか**

安倍晋三元首相が凶弾に斃れて早1年が経つ。しかし、今なお日本の政治は「安倍一強」を超えられずに迷走する。その「安倍一強」は衆院の「小刻み解散」と3年ごとの参院選を組み合わせた選挙戦略によって土台が形成された。野党側は再起へのシナリオが描けず、党内の反対勢力は沈黙した。第4巻ではこの「一強体制」の完成までを追った。続く平成から令和への代替わりを経て、安倍政権の終焉までの足取りは第5巻に委ねた。




岩波書店
2,970円

### 『ジャーナリズムのココロとワザ―東京新聞ウォッチ20年』

橋場　義之（毎日新聞出身）

**〝発表報道〟批判を超えるために**

中日・東京新聞の社内報「紙面審査報」で２００３年から22年までに連載したコラム計１５４本を加筆・修正して一挙掲載した。批評の対象は、イラク戦争や東日本大震災、改元などビッグニュースもあるが、むしろ大部分は、記者が日常的に扱っている〝普通のニュース〟。その報道の質を高めるためにはどうしたらいいか――ふだん忘れがちなプロとしての心構えやテクニック、特に取材対象の５Ｗ１Ｈすべてに疑問を持ち続け、想像力を働かせながら全体像に迫る姿勢を再確認してほしい。




論創社
2,640円

### 『昭和人の棲家　報道局長回想録』

平本　和生（ＴＢＳテレビ出身）

**偶然に残った資料から**

新卒入社から半世紀ＴＢＳに在職した。三菱重工本社爆破事件取材で惨敗からの記者スタート。田中番記者、ベルリンの壁崩壊、プラザ合意、９・11、イラク戦争など取材資料を整理してみた。経営の立場では、楽天との委任状争奪戦もあり、実に多くの方々の支援を得た。「昭和人の棲家」としたのは、鬼籍に入られた方々の思いが、捨てずに残った資料でたどれると思ったのがその理由。挑戦した人々の息づかいを書き残したかった。




新潮社
1,980円

### 『学習院女子と皇室』

藤澤　志穂子（産経新聞出身）

**メディアが加害者、被害者に**

小室眞子さんの結婚において、その意志の強さ、行動力に驚き、違和感を覚えた国民は多いだろう。皇族の女性が皇室を出たいがために、夫となる男性に米ＮＹ州の弁護士資格を取らせ、一緒に米国に渡り自由な生活を満喫するという前代未聞の展開なのだから。その「違和感」の背景を、「ノブレス・オブリージュの欠如」ととらえ、曾祖父から4代の学習院出身で、眞子さんの先輩にあたる筆者が分析した、学習院女子と皇室をめぐる物語。




新潮社
880円

### 『鉄道と愛国　中国・アジア３万キロを列車で旅して考えた』

吉岡　桂子（朝日新聞社記者）

**新幹線が映す日中とアジアの未来**

戦前の弾丸列車にルーツを持つ新幹線を通して日中関係を追いかけるうち、アジアに生きる日本の未来を問う旅になりました。戦後日本の発展の象徴となった新幹線には、日本社会の「熱」が宿ります。旧運輸省担当だった１９９５年から取材してきたテーマを、北京、上海やバンコク駐在の機会にも恵まれ約20カ国で列車に乗り、人に出会って考えました。ルポに加えて、政治家、政策当局者、ＪＲ東海や川崎重工業の首脳ら多くの当事者へのインタビュー、史料と格闘しました。ちなみに、筆者は乗り鉄です。




岩波書店
2,860円

## ■会議報告

**●第445回会報委員会**（7.3 大会議室）

８月号の編集について協議した。

**出席**　榊原委員長、志賀、水野、大石、佐藤、萩原、本橋、稲澤、倉重、二村の各委員。

**●第245回施設運営委員会**（7.11 小会議室）

2022年度と23年度４月から６月の事業収益について事務局が報告した後、お盆期間の時短営業を決めた。

**出席**　米田委員長、菅谷、神辺、鈴木、辻、高木、山本の各委員。

**●第541回企画委員会**

（7.12 10階ホール＆オンライン）

党首討論会の開催方式および、今後のゲスト候補について意見交換した。

**出席**　藤井委員長、黒沢、井田、佐藤、元村、橋本、大内、菅野、辻本、高橋、乾、森田、小林、中村、澤田（信）、早川、山口、岡山、伊藤、出川、川戸、播摩、平井、野田、江川、倉澤、迫田の各委員。

**●第551回会員資格委員会**（7.13 小会議室）

新任の村尾新一委員（読売新聞）と菊池正史委員（日本テレビ放送網）があいさつした後、８月１日付入退会を審議、理事会に答申した。

**出席**　前木委員長、早田、竹川、村尾、今市、菊池、森安、古賀の各委員。

## 日中平和友好条約45年、元駐中国大使の遺言

日中平和友好条約が結ばれてから、この８月で45年になる。すでに、有名無実化した観の条約だが、今こそ、この条約の存在、その精神を大いに喧伝すべきではないだろうか。

昨秋、87年の生涯を閉じた元駐中国日本大使の佐藤嘉恭（よしやす）さんは、最期の枕元で日中関係の現状を嘆き、長女の路美さんに「反覇権」を謳った日中平和友好条約への思いを切々と語っている。

路美さんがまとめた手記の中から、佐藤さんの最後の願いを紹介したい。

＊

（父は）亡くなる数日前、ほぼ話すことができなくなった状況でも、ふと目を開けると振り絞るように、ゆっくりと、でもはっきりと、「双方（日中）は覇権に反対する、覇権を求めない、そうはっきりと意志を表明している。（このことは）大事。忘れてはいけない」と口を一生懸命に動かし、繰り返しました。そして、「にっちゅう、ゆうこう、へいわ、じょうやく、それだけ伝えてくれればいい、それでいい。それでわかる」と言葉をつむぎました。「わかった、伝えるよ」と私が言ったあと、ホっとした笑顔になり、安心したようにまたすぐ眠りにつきました。これが、父の遺言かのように響いております。父の人生、いつも根底にあったのは平和祈念だったのだと改めて教えられた思いです。

近藤龍夫（朝日新聞出身）

## 会報委員から

# 秋田・首都圏つなぐ記事

秋田魁新報は毎週日曜に「首都圏発」というコーナーを設けている。ここでは首都圏の秋田県関連の話題を「トピックリポート」、首都圏で仕事や活動をしている県出身者を「あきた人」として原則各１本を掲載。東京支社が取材を担当している。

元となるコーナーは１９８５年に始まった。タイトルは何度か変更されたものの、取り上げる対象は大きく変わっていない。継続して掲載してきたためか、支社に記者が常駐していることは県関係者に認知されているようだ。

コロナ禍ではめっきり少なくなった取材依頼も、各種活動の再開とともに復活してきた。最近の「トピックリポート」は、県出身者による文化芸術活動やイベント企画、研究成果の発表など話題に事欠かない。

取材をしていると、進学や就職、結婚を機に移住した県出身者の多さを実感する。関東地区にある県人会の会員総数は約１万３千人。現役世代を中心に入会していない人は多数おり、実際には何倍もの人が暮らしているだろう。

５年前に県内支局に勤務していたころは、人物紹介の取材で公務員以外の20～30代を探すのに難儀した。それが首都圏では比較的容易に探し出せる。

美容師、音楽家、医師、弁護士、スポーツ指導者―。紙面で「あきた人」として紹介できる人が尽きないのはありがたいが、人口減少が進む秋田から若者が離れている現実にも直面する。複雑な思いをしばしば抱く。

古里を離れると時間とともにつながりが薄くなりがちになる。紙面で取り上げると、取材を受けた人からは「記事を読んだ秋田の友人から久しぶりに連絡をもらった」と言われる。Ｕターンに直結しなくとも、記事が古里を振り返るきっかけになってほしいものだ。

秋田魁新報社東京支社編集部長

大石　卓見

## レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766・2731

**和食　葉月会席（8/31まで）**

前菜：モロコシ豆腐、穴子寿司など　お椀：蟹真薯 かき玉仕立て　お造り：旬の三種盛り　焼物：鰻二色蒲焼き　冷やし鉢：冬瓜、鴨など　揚物：海老アーモンド揚げ　食事：稲庭うどん　水菓子：時の物（5,500円）　（板長：加賀谷純）

**洋食　季節のおすすめコース（8/31まで）**

スズキと夏野菜のマリネ、冷製トマトクリームスープ、牛リブロース肉のガーリックステーキ、ブドウのゼリーとゆずシャーベット、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス（4,400円）。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。（シェフ：佐藤和治）

## レストラン・アラスカ（夜の部）半額 8/31まで

8月31日まで10階レストラン・アラスカのディナータイムの一般メニューを会員限定で半額で提供します。ご予約は03-3503-2766までお願いします。

## 貸室の空き状況　ウェブで確認を

クラブの貸室（9階小・大会議室、会見場、10階ホール）の空き状況をクラブのウェブサイトで確認できます。トップページの上部にある「施設利用案内」から「空室検索」を選ぶと、各部屋の空き状況が表示されます。カレンダーのアイコンで日付を選択し、希望日の状況をご確認ください。1年先まで空き状況を見ることができます。

## 8月はクラブの貸室料金が半額

夏の会員サービスとして、8月31日まで貸室料金が半額になります。この機会にぜひご活用ください。

貸室の利用申し込みはフロアマネジャーまでお電話ください（03-3503-2724）。またはラウンジの受付で承ります。

## ゴルフ会の再開を検討中です

クラブのゴルフ会は、コロナ禍で開催を見送ってきましたが、ある程度の参加が見込まれれば、10～11月に若洲リンクスでの再開を考えています。参加希望か、検討するという方は、事務局の河野（03-3503-2764、kono@jnpc.or.jp）へお申し出ください。

## 訃報

早房長治会員（朝日新聞出身、85歳）が7月8日に死去されました。

ご冥福をお祈りいたします。

## 新しい個人D会員



**板野（いたの）　裕爾（ゆうじ）**　1977年NHK入局。経済部長、福島放送局長、放送総局長、専務理事、NHKエンタープライズ代表取締役社長。NHK専務理事を再び務め、2023年4月退任。

一ジャーナリストとして再出発いたします。よろしくお願いいたします。ひとまず大学で講座を持ち、若い方々と一緒になって勉強したいと思っています。



**前田（まえだ）　浩次（こうじ）**　1980年朝日新聞入社。学芸部、文化事業部音楽舞台催事、文化部読書面、同テレビ面編集長、社史編修センター長。2022年12月退社。

史料スキャンを進めて事項チェックを効率化し、社外研究や「いだてん」等の作品にも協力。メディア自身の過去検証を続けます。

## <法人代表変更>

- 上毛新聞社
  関口雅弘 代表取締役社長（旧 内山充氏）
- 中央公論新社
  安部順一 代表取締役社長（旧 天野真志氏）
- 日本プレスセンター
  神田俊英 専務取締役（旧 富田恵氏）
- ジェイ・スポーツ
  亀井宣晃 取締役（旧 今野義範氏）
- 日本海テレビジョン放送
  西嶌一泰 代表取締役社長（旧 田口晃也氏）

## 今後の行事予定（8/2現在）

| | |
|---|---|
| 21㊊ | 16：00～17：15　10階ホール<br>著者と語る『ウクライナ、地下壕から届いた俳句～The Wings of a Butterfly ～』<br>ウラジスラバ・シモノバさん、黛まどかさん |
| 22㊋ | 14：30～15：30　10階ホール<br>「多様性社会への課題」⑦<br>木村弥生 江東区長 |
| 23㊌ | 17：30～18：47　10階ホール<br>試写会「鯨のレストラン」 |
| 30㊌ | 14：00～15：30　10階ホール<br>水俣病認定訴訟原告、支援者と原一男「水俣曼荼羅」監督　会見 |
| 9月<br>4㊊ | 15：30～17：35　10階ホール<br>試写会「過去負う者」<br>17：45～18：45　会見　会場は同じ<br>舩橋淳 監督、名執雅子 元法務省矯正局局長 |
| 6㊌ | 13：00～14：30　10階ホール<br>「中東和平合意から30年」<br>立山良司 防衛大学校名誉教授、池田明史 前東洋英和女学院大学学長 |


**クラブの電話　ダイヤルイン**

- 和食レストラン（9階）……☎3503-2723
- 洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724
- 受　付……☎3503-2721
- 会員事務……☎3503-2727
- 経　理……☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み……☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp



**会員現況**

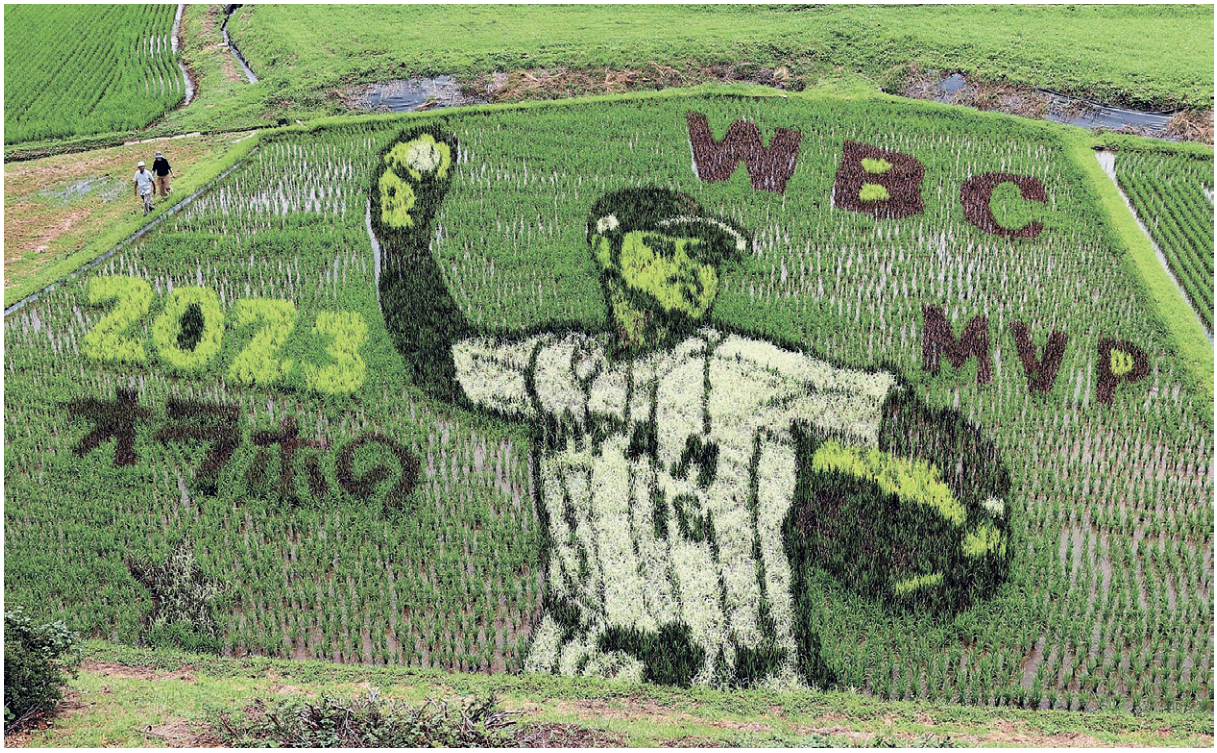
●法人会員：126社　●基本会員：716人　●個人会員：1,062人
●法人・個人賛助会員：53社・117人　●特別賛助会員：93人
●名誉・功労会員：13人　●学生会員：47人　計179社・2,048人

**会報委員会**

委員長＝榊原　智
委　員＝稲澤　裕子　大石　卓見　勝田　洋人　倉重　篤郎　佐藤　庄太　志賀　英樹　二村　伸　萩原　豊　水野　雅央　本橋　春紀
（事務局：本庄五月　杉本翔一）
☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

# 写真回廊

撮影：富永（とみなが）　健太郎（けんたろう）（読売新聞社東北総局）




米大リーグ・エンゼルスの大谷翔平選手の出身地・岩手県奥州市に登場した大谷選手を描いた田んぼアート＝６月29日

## 生まれたのは、日本の田舎…

思い出話をしたい。２０１８年7月27日。岩手県盛岡市で開かれた第23回ＮＩＥ全国大会の会場で、花巻東高校の先生が新聞を使った教育実践を報告した。生徒の作文を岩手日報など新聞に投書する取り組みだ。「掲載される頻度が上がってきました。なかなかの名文に出会うこともありますよ」。新聞に載った優秀作品が映し出され、その中に「大谷翔平」の名前が見えると会場はどよめいた。「大谷は、私が担任をしていました」。先生のちょっぴり誇らしげな顔が微笑ましかった。今は、その何十倍、何百倍もの誇らしさに、それも毎日のように先生は包まれているに違いない。

活躍があまりにすごすぎて、メディアも識者も的確な表現ができずにいる。米国のメディアは「彼はどこの惑星から来たのか」を繰り返し、慶應大学特任准教授の若新雄純（わかしんゆうじゅん）さんは「人類を励ますために未来から送り込まれたターミネーターではないか」とテレビでコメントした。作家の五木寛之さんは「長生きしたい。好奇心は尽きず、見届けたいことが山ほどあるからだ。米中対立はどうなるのか。大谷翔平選手は10年後メジャーでどんな立場にいるのか」（２０２２年1月1日、日経新聞）と話した。「大谷翔平」を語るとき、みんなが夢見る子どもに戻ってしまう。スポーツの力、人間の力を改めて思い知らされる。

ＷＢＣで優勝を決めた試合の後も、またぞろ米メディアから「真剣に聞くけど、いったいどの惑星で生まれたの？」と尋ねられていた。「生まれたのは、本当に日本の田舎というか…」と丁寧に返す言葉からは、ふるさと岩手を愛おしむ思いが伝わってきた。世界の、いや宇宙のスーパースター「ショーヘイ・オータニ」は、田んぼアートに刻まれた「オラホの」の４文字でさらに高く光り輝く。

（小川　一）